

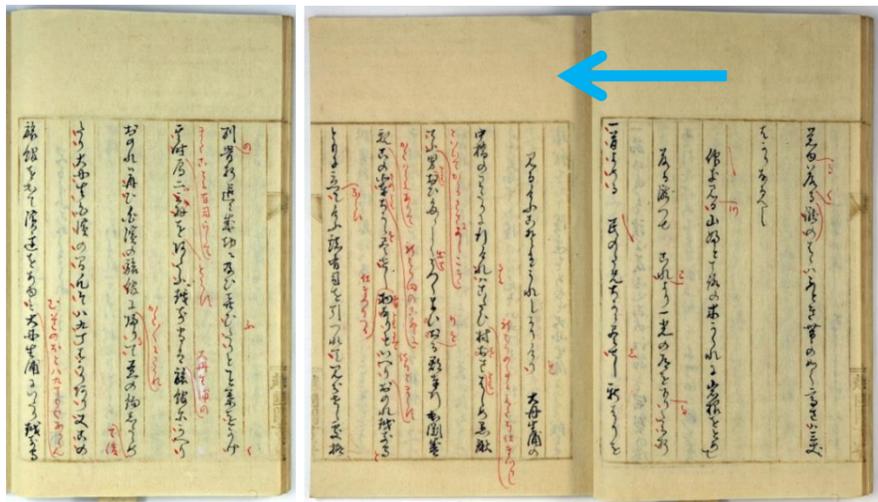
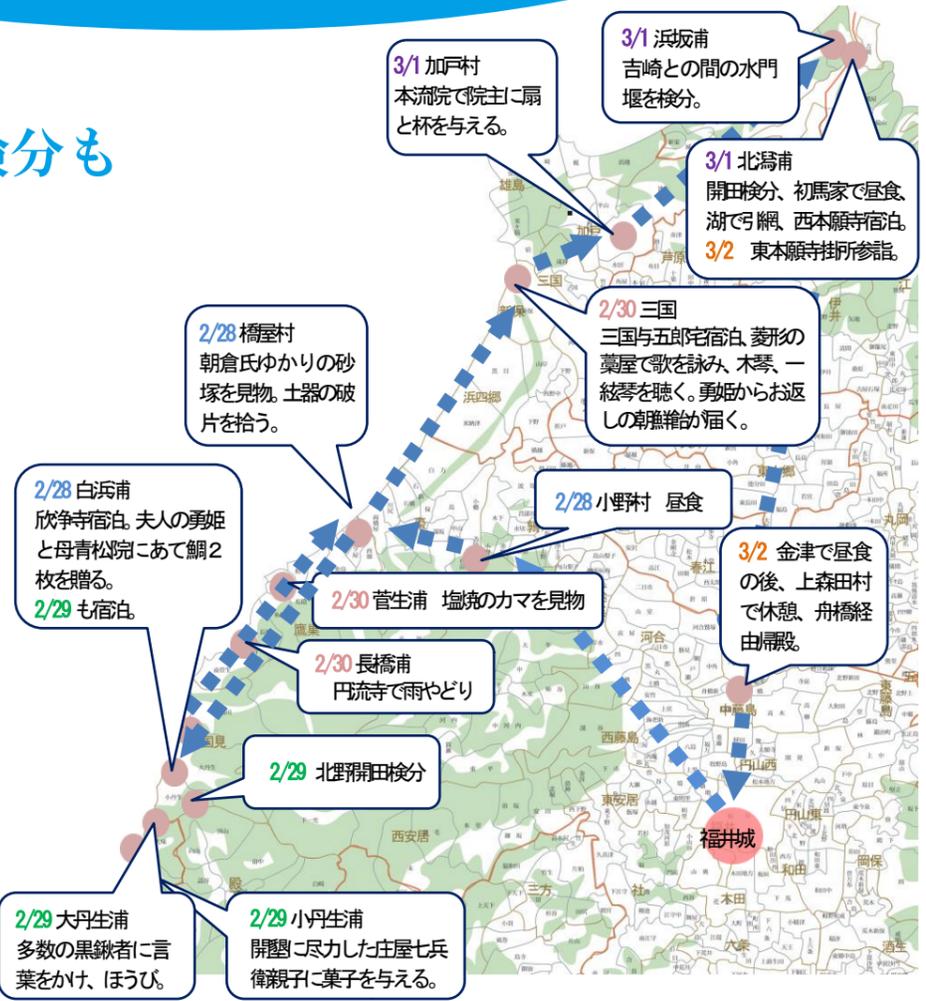


松平春嶽の歌日記

● 新田や新設の用水・堰の検分も

けふよりは 心のどかに 海巡り
遊びくらさん 長き春日を
春嶽はこんな歌を口ずさみながら、
出発したと書いています。桜を愛でたり、
海辺の景色を眺めたりして、歌三昧の風雅な旅かと思われそうですが、同時に各地で新田や新設の用水・水門堰などを検分していました。

たとえば2月29日には、五太子の滝の下から用水を引いて開墾した新田（北野開田、大丹生浦）を、別に遠出していた藩主茂昭とともに検分し、この土木工事に尽力したおびたしい数の「黒鍬者」たちに労いの言葉をかけ、ほうび（雁2・3羽）を与えていました。



【慶応三年二月二十九日の条】
 仰ぎ見る 山ふところの木かくれに 岩根をとめて
 落ちる滝つせ 一 此れより一光の道を下りたる折、
 一首よめる 民のため ちから尽せし新はりを²
 見るけふこそは うれしかりけり 大丹生浦の
 中橋のわたりに行けれハ、こたひ村おさはしめ黒鍬³
 てふ男おひたしくうつくまひおる、郡奉行出淵盛⁴
 親この輩ちから尽せし物なりといへり、おのれ・越前守⁵
 ともに立て、けふ諸有司を引つれて見分せし処、格
 別骨折、追々成功ニ及ひ喜ひたりと、こと葉をかけ
 其時雁二・三羽をあたふ、越前守は旅館にかへり
 おのれハ再び白浜の旅館に帰りて昼の餉したゝめ
 たり、大丹生・白浜の間凡そ八・九丁はかりあり、又この
 旅館を出て浜辺をあゆみ大丹生浦にいたり（後略）

1 滝つせ 水の激しく流れる瀬
 2 新はり 新治。新しく開墾したること
 3 黒鍬 土木作業を行う者

* 都合で黒字部分のみを翻刻しています。